

園生活における望ましい習慣や態度の育成

～幼児理解の視点から～

宜野湾市立普天間第二幼稚園教諭

中真艶子

目 次

I	テーマ設定の理由	21
II	研究目標	22
III	研究仮説	22
IV	研究の全体構想図	23
V	研究の内容	24～28
1	園生活における人とのかかわり	24
(1)	人とかかわる力の発達	24
(2)	仲間とのかかわり	24
(3)	保育者とのかかわり	25
2	幼児理解	25
(1)	幼児理解からの出発	25
(2)	幼児理解の視点	25・26
3	人とのかかわりにおける保育者の役割と援助	27
(1)	保育者の役割	27
(2)	援助とは	27
4	保育の振り返りとカンファレンス	28
(1)	保育カンファレンスの特徴	28
VI	保育実践	29～41
1	1組の在籍	29
2	ねらいと内容	29
3	1組の実態	29
4	保育仮説	30
5	展開	31
6	検証保育の反省及び指導助言	32
7	保育カンファレンス	33
●	保育の循環	34
●	事例1 (信頼関係を築く)	35
●	事例2 (人とのかかわりにおけるG男の変容)	36～38
●	事例3 (J男の育ち)	39・40
●	事例4 (豊かな仲間関係)	41～42
VII	成果と課題	42
1	成果	42
2	課題	42
3	終わりに	42

<主な引用文献・参考文献>

園生活における望ましい習慣や態度の育成

—— 幼児理解の視点から ——

普天間第二幼稚園 中真艶子

I テーマ設定の理由

新幼稚園教育要領が平成10年12月に告示され、平成12年4月1日に実施された。

今回の教育課程の改善では幼稚園から高校までと盲、聾、養護学校の初等中等教育全体の基準改訂について同時に審議し、各学校段階の教育内容の調和と統一が図られた事が大きな特徴となっていると言われているが、その背景には、国際化、情報化、少子化、高齢化、経済構造の変化など我が国の社会変化を踏まえた新しい時代の教育のあり方について、第15期中央教育審議会からの提言がある。

幼稚園教育要領の改訂では幼稚園教育は「環境を通して行うものである。」ということの基本とし、幼児期の特性を踏まえ、遊びを中心とした総合的な指導を行うという、これまでの考え方を引き続き充実、発展させることと述べている。加えて、教師の役割についての明確化、豊かな体験が得られるような内容やねらいの改善、幼稚園から小学校への円滑な移行、幼稚園運営の弾力化等が改訂の基本的な方針として示され、教育内容の改善では特に、幼児期からの心の教育の重要性が示された。

私は、これまで、子供達にとっての環境のとりえ方や、主体的な生活への手立て、環境構成の工夫など園目標の実現にむけ実践を積み重ねてきた。しかし、少子化、情報化の著しい進行の影響、過干渉や過保護の傾向の増大、人間関係の希薄化、遊びの喪失、家庭教育力の低下など、今日の幼児を取り巻く環境は相変わらず厳しいものがある。例えば、自分の意見ばかりを主張し相手の話を聞かない子、自己抑制の弱い子、私語や立ち歩きで授業ができない等の基本的な生活習慣の欠如。また、先生の指導を無視する学級崩壊の一因が家庭教育力の低下と相まって、小学校と幼稚園の教育方法のギャップや教員間の連携不足にもあるのではないかと指摘があるのも事実である。このような状況におい

て幼稚園においても指導計画や指導方法に誤りがなかったか今一度、点検してみる必要がある。

さらに、青少年による事件や犯罪、いじめの問題や不登校の問題、今、新聞などで話題になっているプログラム駆動症候群⁽¹⁾といわれる子供たちの社会生活への不応は、人間関係の希薄化に起因するものと思われる。また、高齢化社会とも言われる今日であるが、子ども達の毎日の生活の場に高齢者や障害のある人々が少なく、尊敬や思いやりが育つ環境とは言えないのではないだろうか。

ところで、本園においても自分の要求が通らないと癇癪を起こして、家へ帰ろうとしたり、殴りかかったりする子がいたり、乱暴な言葉を浴びせ注目されることを得意がる子もいて友達とかかわる力が弱いといった実態がある。

社会性の育ちを考える時、幼稚園という同年齢の多くの幼児や先生との生活は幼児期に重要な意味を持つ。友達と一緒に物事をやり遂げたうれしさや充実感、時には仲間はずれにされた寂しさ、悲しさ、くやしき等の様々な感情体験を味わい、そういう体験を繰り返すことによって、自分の気持ちと違った他者の気持ちを理解し、共感や思いやりのある行動が育ち、人とかわる力の基礎が培われる。そこで、保育カンファレンス⁽²⁾を通して幼児理解を深めることで、環境の構成や教師の援助も適切なものとなり、園生活における望ましい習慣や態度を育てることができるのではないかと考え、本テーマを設定した。

- (1) プログラム駆動とは「何かをしよう」と動機を心の中に作れないため、外部にあるプログラムを読み込みそれに操縦されて起こす行動。
- (2) カンファレンスとは事例に基づいてそれぞれの判断を出し合い、検討しあうことにより適切な理解や処置を図っていくこと。

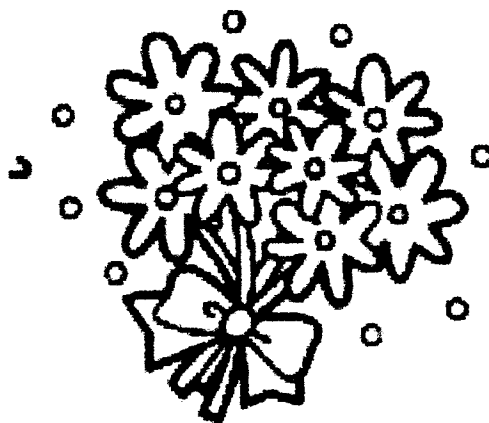
Ⅱ 研究目標

園生活における望ましい習慣や態度を育成するために理論研究や発達に応じた援助のあり方を研究する。

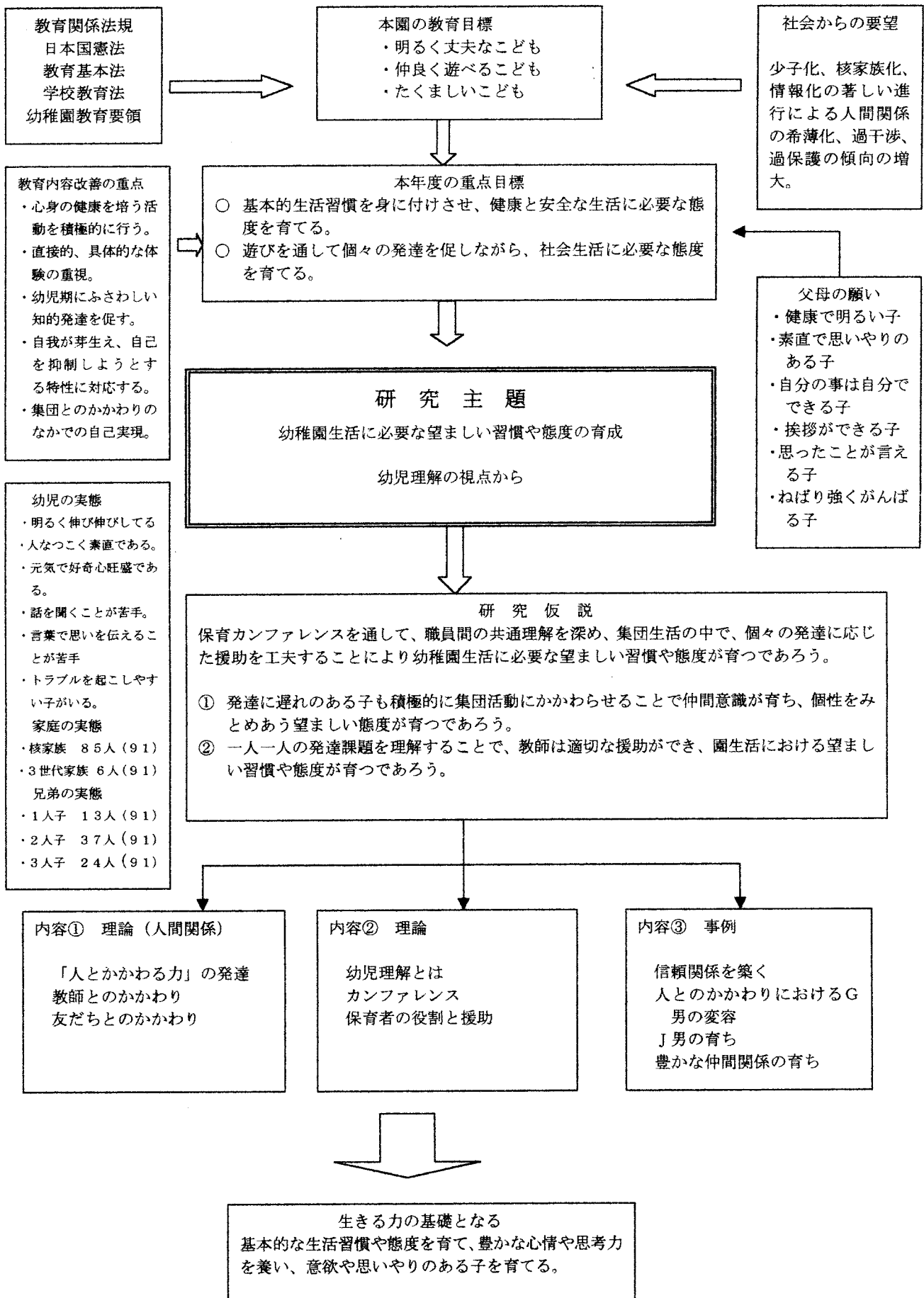
Ⅲ 研究仮説

保育カンファレンスを通して、職員間の共通した幼児理解を深め、集団生活の中で個々の発達に応じた援助を工夫することにより望ましい習慣や態度が育つであろう。

- (1) 幼児一人一人の発達課題は違うことを理解することで教師は適切な援助ができ、望まし習慣や態度が育つであろう。
- (2) 発達に遅れのある子も積極的に集団活動に関わらせることで仲間意識が育ち、個性を認め合う望ましい態度が育つであろう。



IV 研究構想図



V 研究内容

1 園生活における人とのかかわり

(1) 人とかかわる力の発達

幼児期における人とのかかわりはどのように発達していくのだろうか。発達心理学者の佐伯胖は次のように説明している。

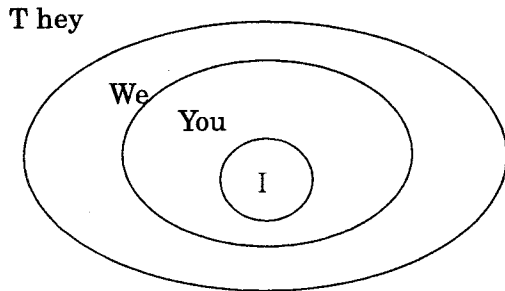


図1 学びのドーナツ・発達モデル

I 世界・・・自分中心で、他者がよくみえていない世界である。入園したばかりの幼児はそうした世界が中心となる。

You 世界・・・**You**は保育者のことである。保育者は子どもを温かく見守り、受入れ、すべてを理解してくれる、わかってくれる存在である。この保育者の温かいまなざしに見守られながら、自己を拡大していくのが**You**の世界である。

We 世界・・・保育者に見守られながら子ども達は次第にまわりの友達に目を向け、仲間との豊かな世界となる。**We**世界が広がるのは友達との共通項が増えてくること、また、みんなということに自分も含まれるという認識でもある。

They 世界・・・現実世界を意味する。社会的規範やスケジュールと言ったものに縛られる世界である。幼児期は保護されながらも**They**世界の存在に気づき、そこに一歩踏み出す時期である。

以上、佐伯は人とかかわる力の発達を学びのドーナツ・発達モデルで示している。

(2) 仲間とのかかわり

仲間とは年齢、立場などのほぼ等しい人同士をさし、自由で解放された子供同士の関係である。しかもこの関係は、家庭で経験した人間関係について、子供がどのように捉えているかを反映する。例えば、好ましい親子関係が展開されていれば、他者との温かい関係を望み、そのための努力を行っていこう。逆に、親の愛情を子供が拒否していれば仲間との関係も避けようとすると言われている。

仲間の与える影響の一つは、言語を含めて、家庭では得られない技能の学習にある。しかし、仲間からの学習は、親が承認できないものも少なくない。親が拒否してもなかなか改めようとしなないだけの影響力を持っている。また、仲間と一緒に積極的に探索し、お互いに経験を広げ合い豊かにすることも出来る。さらに「ごっこ遊び」を通して、多様な役割を交換する中で役割取得能力を高め、自己中心性から脱していくだけでなく、相互の情緒的な結びつきをも形成していく。

仲間との関係において、子供が適応的であるためには、ある時には自分の欲求や行動を抑制し、またある時は自分の欲求・意志をはっきりと自己主張し、行動として実現していくことが必要となる。すなわち、自己抑制と自己主張・実現という二つの対照的な次元において、状況に応じて自己をコントロールすることが出来るようになると言える。

(3) 保育者とのかかわり

幼稚園は家庭という小集団から家族以外の大人や他の子どもへと人間関係が広がっていくところである。そういう中で母親まではいかなくとも心の基地としての保育者の存在は大事である。幼児期は大人への依存を基盤としつつ自立へ向かう時期であり、保育者が子どもに愛情を持って接し、子どもの気持ちに共感し、信頼関係を持つことが子どもが自信をもって幼稚園生活を楽しみ、仲間との関係も豊かになる生活を支えることになるのである。また、保育者は他者の行動に気付かせ、共感を誘うようにしたり、子ども相互の意図や要求を確認してそれを取り次いだりする事も必要である。そういう積極的な援助が仲間関係を豊かにする。

2 幼児理解

(1) 幼児理解からの出発

保育とは一人一人の幼児が教師や多くの幼児達との集団生活の中で、周囲の環境とかかわり、発達に必要な経験を自ら得ていけるように援助する営みである。そのためには、教師は幼児と生活を共にしながら（直接に触れ合いながら幼児の行動や表情から）、何に興味をもっているか、何を表現しようとしているか、何を感しているか、どのような経験が必要かなどをとらえ続けていかなければならない。このことから、保育を進める際の具体的なねらいや内容もこのような幼児理解に基づいて設定するものであり、幼児が発達に必要な経験を得るための環境の構成や教師のかかわり方（援助）も幼児を理解することによって適切なものとなる。

ちなみに、指導書では自然な心身の成長に伴い、幼児が能動性を発揮して環境とかかわり合う中で状況と関連づけて生活に必要な能力や態度などを獲得していく過程が発達であるとしている。

- ・ 人は周囲の環境に自分から能動的に働きかけようとする力をもっていること。
- ・ 幼児期は能動性を十分に発揮することによって発達に必要な経験を自ら得ていくことが大切な時期であること。
- ・ 能動性は、周囲の人に自分の存在や行動を認められ、温かく見守られていると感じる時に発揮されるものであること。

このような発達観をもって、その幼児のよさや可能性、発達する姿、心の動きなどを温かく受けとめ、理解しようとする教師の存在が幼児の発達を促す上で重要な意味を持つのである。

さて、5歳児一年保育の幼稚園においては、幼児期後期の子どもたちであり、それぞれ育つ家庭環境が異なり、多様な生活経験を積み重ねることによって、異なった特性を備えての入園となる。

したがって、幼児の生育暦や実態を知ることとも幼児理解の上で重要である。実態把握の方法としては、家庭生活調査、生活習慣調査、家庭訪問等の保護者からの聞き取り、発達検査などがあるが、プライバシーの問題でもあり調査にあたっては十分な注意が必要である。

(2) 幼児理解の視点

① よさを捉える

幼児の行動は教師の見方や接し方で大きく変わっていく。教師がひとり一人の幼児のよさや可能性を捉えようとする目をもって幼児を理解しようとするのが幼児の望ましい発達を促す保育を作り出すために必要となる。

- ・ さまざまな幼児の姿を発達していく姿としてとらえる。
- ・ その幼児の持ち味を見つけて大切にすること。
- ・ 教師自身のものの見方をプラスの方向に変えていく。

② 活動の意味を理解する

一人一人の幼児にとって、活動がどんな意味を持っているかを理解するには、教師が幼児と生活を共にしながら、なぜこうするのか、何に興味があるのかなどを感じ取っていく必要がある。幼児の生活する姿をこれまでの周囲の物や人との関係（生活体験）で捉え、目の前の姿と関連づけていくことで活動の意味を垣間見る事ができる。幼児自身が活動を生み出して展開する過程で得る様々な経験を大切にしていくことが重要である。

③ 発達する姿を捉える

発達とは単に「何かができるようになること」ではなく、人格の全体にかかわる深い意味を持つこととしてとらえなくてはならない。つまり、幼児は自ら能動的に環境に働きかけ、発達に必要な経験を得ていく力をもっている。幼児が発達しようとしている姿を読み取る目が必要となる。毎日同じ遊びを繰り返しているようでも、幼児は其中で日々新たな事へと挑戦を試みているものである。

幼児の発達する姿は、具体的な生活の中で興味や関心がどのように広げられたり深められたりしているか、遊びの傾向はどうか、生活への取り組み方はなど、生活する姿の変化を丁寧に見ていくことによって捉えることができる。

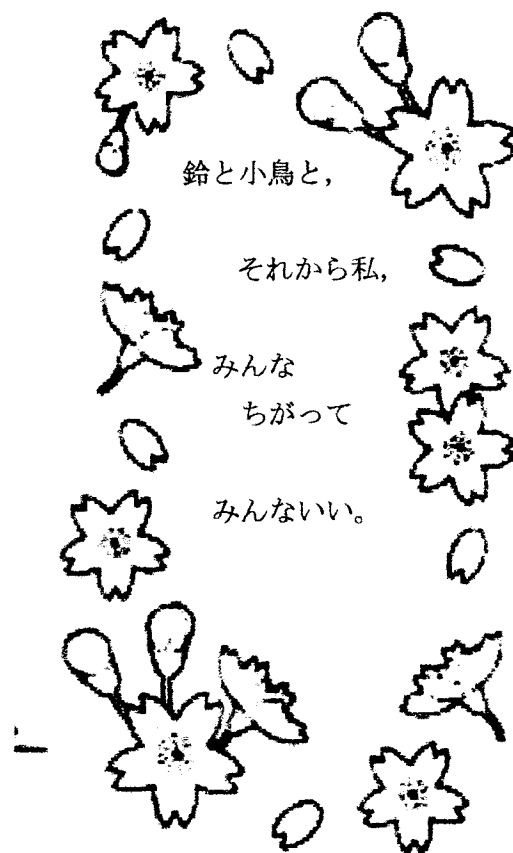
④ 集団と個の関係を捉える

毎日の保育は一人一人の幼児の発達を促す営みであるが、教師と大勢の同世代の幼児が共に生活する幼稚園では、集団のもつ様々な教育機能によって促される。保育を進めるためには個々を見る目と集団を見る目の両方が必要であり集団と個々の幼児との関係を受けとめて、具体的な保育の手だてを考えていかなければならない。また、

全体を捉えていくことで、逆に一人一人の発達やその子らしさがはっきり見えてくることが多い。

⑤ 職員間の共通理解

教師は自分と幼児との関係のなかで一人一人の幼児を理解している。しかし、別の教師は違う場面を見ていたり同じ場面でも異なって捉えていたりする事もある。また、幼児自身がそれぞれの教師によって違ったかかわりの姿を見せていることもある。したがって、日々の保育を共に振り返ることで教師が一人では気づかなかったことや、自分とは違う見方、考え方に触れることができる。幼稚園の全職員で一人一人の園児を育てるという視点に立つことが大切である。

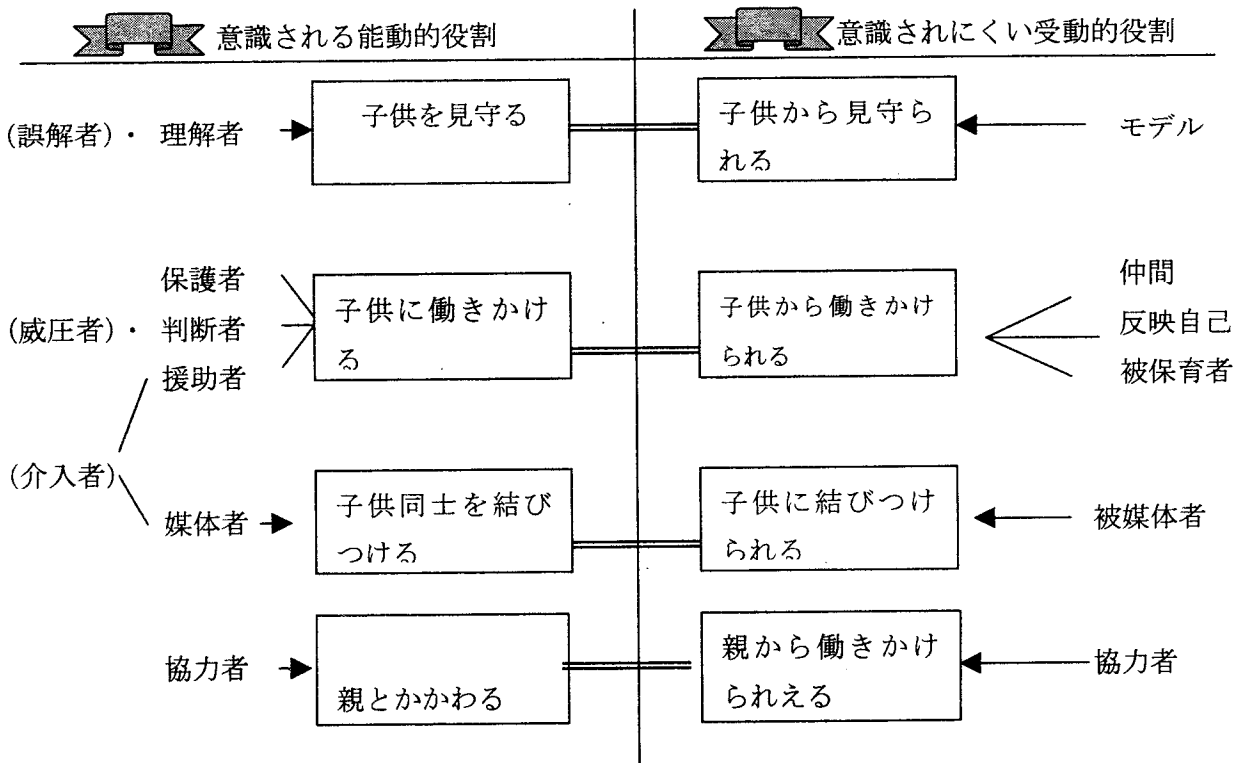


3 人とのかかわりに関する保育者の役割と援助

(1) 保育者の役割

保育者は幼児を取りまく環境の中でも、最も重要な役割を果たす存在である。その他の環境物や事象と異なる点は、それが生きていて、意思や感情を持っていることである。また、保育現場は常に状況理解と適切なかかわり方が要求されるが、意識された役割だけが存在するわけではなく、その役割によって幼児が捉える保育者像も変わってくる。

表1 保育者の役割



(2) 援助とは

幼児と生活を共にしつつ、幼児が展開する活動の中に個々の幼児の興味や関心、発達の課題などを見だし、必要な体験を積み重ねていけるように環境を適切に作り出すことである。

直接的働きかけ

<うなずく> (非言語的態度による受容、応答) 子供の行動を受容し、適切な形で応えてあげる。

<遊びのきっかけをつくる>

<場や物への配慮> 集団生活の場では常に子供の人数に対して遊び場や物の数が制限される。

<遊びをひろげる> 遊びが停滞している場合等。

<考えの道すじをつける> ぶつかり合いの経験こそが子供が自分の課題に直面していることであり、安易に先生が解決の方法や回答をだしてしまうのは子供の発見学習の芽をつぶしてしまうことになる。

4 保育の振り返りとカンファレンス

倉橋惣三の著書『育ての心』の中に「子どもが帰った後」という文がある。

「子どもが帰った後、その日の保育が済んで、まずほっとするのはひと時、大切なのはそれからである。子どもといっしょにいる間は、自分のしていることを反省したり、考えたりする暇はない。子供の中に入り込みきって、心の一寸の隙間も残らない。ただ一心不乱。

こどもが帰った後で朝からのいろいろのことが思いかえされる。われながら、はっと顔の赤くなることもある。しまったと急に冷や汗の流れ出ることもある。ああ済まないことをしたと、その子の顔が見えてくることもある。――

一体保育は……。一体私は……。とまで思い込まれることもしばしばである。大切なのはこの時である。此の反省を重ねている人だけが、真の保育者になれる。翌日は一歩進んだ保育者として、再び子どもの方へ入り込んでいけるから。」

このように、一日の実践が終わった時点で、自分の保育を振り返ることで幼児理解が深まり、翌日の環境の工夫や援助の手立てが生まれる。保育者はこのような省察を繰り返しながら毎日の保育を行っているが自分の保育

(保育観、発達観等)が固定化しないように他者と交流することが「遊びを通した総合的な指導」「チーム保育」を行う幼稚園においては必要であると考えられる。

その有効な手段として、「保育カンファレンス」がある。カンファレンスとはもともと医学用語であり事例に基づいて、その事例に関するそれぞれの判断を出し合い、より適切な理解や処置を図っていくとともに専門性を高めていくことを意味している。最近では、保育の場でもよく耳にするようになってきた。教育学者の森上史朗は発達68号「保育を開くためのカンファレンス」でカンファレンス

の特徴を次のように示し、保育現場の研修に取り入れることを提唱している。

(1) 保育カンファレンスの特徴

- 「正解」を求めようとしない。
- 「ほんね」で話しあう。
- 話し合いにおいて、相手を批判したり、意見の優秀性を競い合うようなことをしない。
- それぞれの成長を支え合うことの重要性。
- 園長や先輩が若い人を導くという形にならないようにする。

これまでの園内研修では、園長や経験者は若い人を育てようという姿勢が一般的であり、若い保育者もアドバイスを受けるということが多かったように思う。カンファレンス(多様な意見のつき合わせによってそれぞれが自分の考え方を再構築していく)の中で自分も育ち、相手も育つという育ちあう雰囲気を作ることが大事である。

また、カンファレンスの方法についても、園内研修日を利用し、保育記録より疑問に思ったことや反省したことを議題としたり、毎日のちょっとした時間を利用して一人、二人と、無理のない方法を工夫する必要がある。

他者の意見を聞くことで、自分の保育(環境の構成や援助の仕方、子どもの見方など)が一歩でも進むことを願い、幼児理解の視点から毎日の保育を意識し、今日の私のかかわりはどうだったか振り返ることから始まるのである。

VI 保育実践

保育指導案

平成13年1月17日(水)
普天間 第二 幼稚園
指導者 中 真 艶 子

1 1組 在籍 男児 18人 女児 13人 合計 31人

2 ねらいと内容

- 自分なりの目当てを持ちながら遊びを楽しむ。
- 絵本の読み聞かせを楽しむ。
- ・体を動かす遊びを通して、友だちとかかわって遊ぶ楽しさを感じたり、ルールのある遊びの面白さを感じたりする。
- ・先生からコツを教えてもらいながら繰り返し取り組むことで、達成感を味わう。
- ・トラブルは自分達で解決する。
- ・絵本を楽しんで聞く。
- ・聞くときは友達のじゃまをしない。

*人とかかわる視点から大事にしたいこと。

- ・友だちと楽しく生活する中で決まりの大切さに気付き守ろうとする。
- ・いざごはできるだけ自分達で解決していく。
- ・自分の思いを言葉で伝える。

3 1組の実態

- 少々、幼さが感じられるが明るく、素直である。穏やかでいざごを好まない。
- 一学期の頃は、集会時に私語が多く落ち着きがなかったが、毎日の朝の会、帰りの会を重ねることで聞く態度が育ったように思う。
- 友だちと持ち物をそろえ、同じ動きをするということで仲間としての気持ちになっている姿も見られる。時々、仲間はずれにされたと泣く子もいるがいつの間にか解決して一緒に遊んでいる。
- 戸外遊びの好きな子が多く、総合遊具を利用しての鬼ごっこなど楽しんでいる。
- 新しい活動や物に対して興味を持ち、やり方がわかると自分でしたり、先生の助けを求めたりして、自分で出来たという気持ちを実感している。また、友だちの動きを刺激として、自分から新たな活動に取り組む様子も見られるようになった。
- カルタ遊びは自分達で楽しめるようにルールを変えたりしている。
- J男の実態：両親、妹の4人家族である。3歳の時にけいれん、意識障害が起こり琉大病院へ入院する。「硬膜下水腫」と診断され、手術を受けたが記憶障害が残った。筋力が弱く体験不足もあって、体の動きがぎこちない。発達の状況は、検査を嫌がり検査不能との結果を受けているが、生活の様子や会話の状態から2.3歳の発達と思われる。時々、好きな子と遊びたいようだが、ペースが違うので相手にされなかったり、遊びが続かないことが多い。

○J男に対して：入園当初より持病（硬膜下水腫）の説明を受けているので、思いやりを持って接している。わがままをゆるしてあげたり、やさしく教えている様子も見られる。また、他のクラスの子にちょっかいを出して相手が怒ってきても「J男はわからないからでしょう」などかばう様子も見られる。

○G男の実態：父親と二人暮らしである。父親は建設業で早朝の出勤が多く、一緒に過ごす時間はほとんど無いようである。近所に祖父はいるが、難聴でコミュニケーションが取りづらい。G男は入園当初から落ち着きが無く、短気ですぐ手が出るので「乱暴な子」という印象を周囲に与えた。語彙は豊富で表現力は豊かである。先生のお手伝いも喜んでする。愛情不足による心の不安定な状態は友だちを誉めると嫌がるなどの言動から推測される。

○G男に対して：一学期、乱暴な子という印象が強くて、「先生、また G男が・・・」と、言いつけてくる子が多かった。その後、担任のG男への接し方がモデルになったり良さを捉えて紹介したり等の援助により、クラスの仲間としてそのままのG男を受け入れている。

4. 保育仮説

○戸外や室内での正月遊びの中で、教師も仲間に加わることにより、遊びが持続し満足感が得られるであろう。

*保育のながれ。

冬休み明け、正月の挨拶も交わしながら園でも環境として、こま、まり、カルタ、けん玉など正月遊びが出来るように準備したので、子供達は喜んでそれぞれの遊びに取り組んでいる。特に、こまは男の子の関心が高く、先生にコツを教わりながら繰り返し練習し、回せるようになった子はその達成感が自信へとつながっているようである。

まりつきは、リズムに合わせ数を数えながら楽しんでいる。時々、「何回できた」と報告してくる。しかし、男の子には物足りないらしく、投げたり、けったり転がしたり、興味の方向が違うことから全体集会の場で、まりの正しい取り扱いについて話し合った。また、蹴っていた子は「何がやりたかったのかな？」などを話し合ううちに「サッカーボールがあればいい」ということで話がまとまり、明日天気がよければ庭で「サッカーをやろう」という事になった



5 展 開

時刻 予想される活動・流れ

- 8:30 ○登園する
- ・ あいさつをする
 - ・ 所持品の始末をする
 - ・ 出席ノートにシールを貼る
 - ・ 飼育物の世話をする
 - ・ 花壇へのみずやり

○好きな遊びを楽しむ
遊びに必要なものを準備する

戸外：砂場遊び、駒
さっかー、竹馬

室内：カルタ、ままごと
積み木、糊、絵本

9:40 ○片付けをする
片づけを済ませた子はクラス
へ集まり、先生や友だちが来
るのを待つ。

○ホールへ集まる。
みんなで絵本を見たり、話を
聞いたりする。

10:30 ○部屋へ戻る
ミルク
○降園前のひととき
今日の活動や明日の活動につ
いて、話し合う。

12:00 ○降園
交通ルールを守って、寄り道しな
いで帰る。

環境の構成及び教師の援助・思い

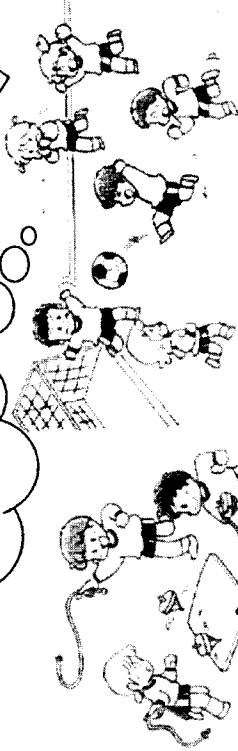
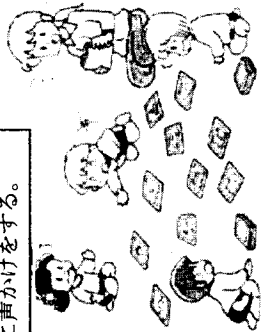
○全体的な援助：子ども達だけでは遊びの理解が様々であるため、長続きしなかつたり、中途半端に終わってしまうことも多い。こうした遊びが継続され自分のものとしてこなしていくためには、教師も遊びの一員として仲間入りすることが必要となる。

朝の出会いを大切に、挨拶を
交わしながら子ども達の思いを
受け止め、今日も楽しく過ご
せるように声をかける。

時々には読み人にな
り、カルタ遊びの
雰囲気を示す。
また、カルタを通
して文字や数字に
関心を持たせたい

R君は遊びに集中
するのですがあまり
ないので、サッカー
を通して満足感を
味わわせたい。

自分達でルールを作ったり
守ったりする姿を見守り、
解決できない時は教師も一
緒に考え、互いの気持ち
伝わるようにする。

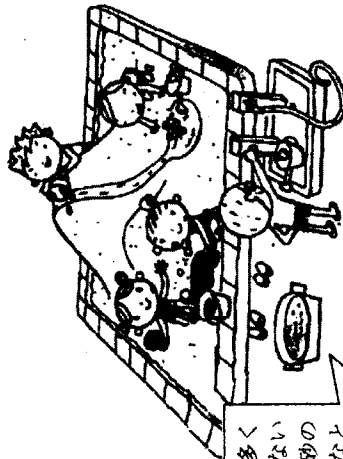


外遊びが多くな
り、発展が見られ
ない。室内環境の
検討が必要だ。



挑戦している態度を認め、
励まして達成感を味わわせ
たい。回せるようになった
子へは、一緒に喜び、みん
なに知らせたい。

駒やサッカーをする子が多く
なり、砂場で遊ぶ子は少ない
が、S君の大好きな場所。砂の
感触を楽しみながら、みんなと
協力して遊ぶ楽しさを感じて
ほしい。



仲村さんへ
感謝しつつ
ゆったりと
絵本の読み
聞かせを楽
しむ。

- 片付けは最後まで。
- やりたいことが十分出来るように場や時間を確保する。
- 戸外の遊具や用具をの安全点検をし、出し入れがしやすいようにしていく。
- 教師のかかわりが弱い部分への気配りを忘れずに。

6 検証保育の反省及び指導助言

(1) 保育者の反省

- 幼児はその日の体の調子などで予想外の行動をとる場合があるが、改めて保育の難しさ、保育者の柔軟な対応の必要性を感じた。S君は毎日砂遊びを楽しんでいて、友達との砂遊びを発展させたいと考えていたが、当日は体の調子が悪く、砂遊びにはまったく関心を示さなかった。凧揚げを短時間楽しんだようだ。また、R君と一緒にサッカーすると約束していたが、どんなに誘っても部屋から出てこず、K男と積み木で遊んだ。来園の先生方が気になったのだろうか。数日前からの保育の流れとして、私がサッカーを抜けることが出来ず、R君やS君は担任へ任せることにした。
- 園全体としては、子供達がそれぞれ目当てを持って遊びに取り組み、満足していたように感じる。帰りの会でも、サッカーやこまについて、「楽しかった」「こまが回せるようになった」「明日もやりたい」と感想を述べる子が多かった。
- サッカーは専門用語も出たりして親しんでいることが伺える。また、点を入れたときの喜びの共感、「おまえはキックがうまいからキーパーはやるな」などポジションの相談や互いの良さを認める発言は、遊びの仲間に加わることで聞けたことであり、子供の世界が共有できた。
- 室内の遊びは発展があまり見られないので、援助の工夫や室内環境の再構成が必要であろう。
- 話しを聞く態度や、友達、先生、来園者などへのあいさつはきちんとしてきて、基本的な生活習慣が形成されている。このことは職員の共通理解やカンファレンスによる日頃の指導が実を結びつつあるものと感じた。

(2) 研究教員の感想

- 遊びの準備、場の工夫が十分なされていた。
- 幼稚園と小学校との連携の大事さが分かった。(学習形態の違い)
- 保護者のボランティア活動がすばらしい。(定期的な絵本の読み聞かせ)
- 絵本を聞く時の子供達の目が輝いていた。
- U君は左利きなのか、みんなと違うこまの回し方なのでうまくいかず、「どうせできないよ」等周りからきびしい声が聞こえる中でがんばっていた。そのU君のこまがまわせた瞬間に立ち会って一緒に喜んだ。しかし、ずっと目を瞬く様子が気になった。
- 1組の朝の会では私語がなく、落ち着いて先生の話の話を聞いている様子に感心した。
- R君が出席調べをしている最中でも先生の肩に乗ったり、会の邪魔になっている様子が見られたが艶子先生が効果的に関わっていた。
- 幼稚園の活動は、遊びの種類や空間が多種多様で子供達の活動も多様である。指導形態としてはTTの形態となるのでカンファレンスの必要性が理解できた。

(3) 指導助言(中頭教育事務所 指導主事 徳本紀子)

- 研究仮説「カンファレンスを通して職員間の共通理解を深めた援助」の視点から先生方の幼児に対する態度や言葉かけ、子供の育ちを観察した。
 - ・室内の絵本コーナーやカルタ遊びのコーナー、戸外ではサッカーやこままわし、凧あげ、などそれぞれの場の構成が十分考えられていた。
 - ・先生方が幼児の活動を、ただ観察するのではなく、一緒に仲間として加わっていくことの大事さが感じられた。遊び仲間に加わることで、活動が持続し満足感が得られると考える。先生方の「一緒に遊ぶ」という熱心な態度が、幼児にも伝わっているように思う。
 - ・挨拶がとても上手で、日頃からの取り組みが見えてくる。挨拶や聞く態度等の基本的な生活習慣は小学校での学習態度にも繋がることなので幼小連携の上でも大事である。
 - ・こまが回せた瞬間の感動を先生も一緒に抱き合って喜ぶ。どのクラスの子へも同じ態度で接する先生方の幼児へのかかわり方のやさしさ、T、Tの大事さを感じた。
 - ・指導案の形式については、視点が明確に把握できるような配慮を心がける必要がある。

7 保育カンファレンス：授業者・普天間第二幼稚園職員

J男について：体調が悪いらしく、いつもの砂場での遊びにはまったく関心を持たなかった。

母親は、欠席させたいと思っていたようだが、9時前になって、本人が「学校へ行くと言うのでつれてきた」と話していた。

体調が優れない時は体を動かすのが億劫になるのは当然だ。砂遊びはしたくないよね。

気分が悪いのに学校へ行きたいなんていいよね。幼稚園が楽しいと思うことが大事だからね。

朝、機嫌が悪くても、Hちゃんが来ると喜んで部屋へ入っていくよ。U子が世話をやきたがるのに。あんまりかまわれるのは嫌みたい。

「艶子先生が遊ばないって」と、しょんぼりしていたが、凧揚げですこし揚がったのでいい顔して満足そうだった。

朝の会は事務所で寝てしまったので、やはり無理したんだ。

元気になったら砂遊びをすると思うので、山つくりとか、お団子つくりをさせたいね。

この頃、言葉が2語文、3語文になってきてない？成長してるよね。

G男について：一緒にサッカーしようと約束をしていたが、どんなに誘っても外へ出てこない。

G男はどんな気持ちだったのだろうか。

サッカーをやりたいと話していたことや、ボールを自分用に確保していたことなどからサッカーが嫌いではないと思うけれど、G男の行動予測があまかったようだ。先生方がいらして緊張したかな。一緒にボール蹴りの練習をしようと誘ってもだめだった。

G男は朝、顔を見たときから様子がおかしかった。いつもは、喜んでやってくれるお手伝いを頼んだら、「先生が自分でやれば？」という態度であった。後で、「G男が外へでないで声かけてみて」と、言われて聞いてみると、「外はみんながサッカーしているから出たくない」という。艶子先生から誘われて逆に彼自信が緊張したみたい。G男はいつも自分が一番でないとおもしろくないようなので、自分より上手な人たちとサッカーするのは嫌だったのではないだろうか。

G男はプライドが高いので、自信のないことは見られたくなかったのかもしれない。中途半端で他の遊びに変わってしまったが、「こま」はどうだろうか。「僕の得意なものはこま」と言えるようになるといいね。

自信を持てるものが多くあると、友だちとのかかわり方も違って来るから。

もうしばらく、T先生に関わってもらって、やり通してくれたらいいね。少々、時間がかかるかもしれないが。

- 特に、J男とG男について保育の振り返りを行った。内面理解に努め、気持ちを推し量ることで援助の方向が見えて来た。また、遊びの発展からサッカーを抜けることが出来なかったが、担任がうまくG男、J男の気持ちをくみ取ってかかわってくれた。

人とかかわる力 (ねらいと内容)

他の人々と親しみ、支えあって生活するために、
自立心を育て、人とかかわる力を養う。

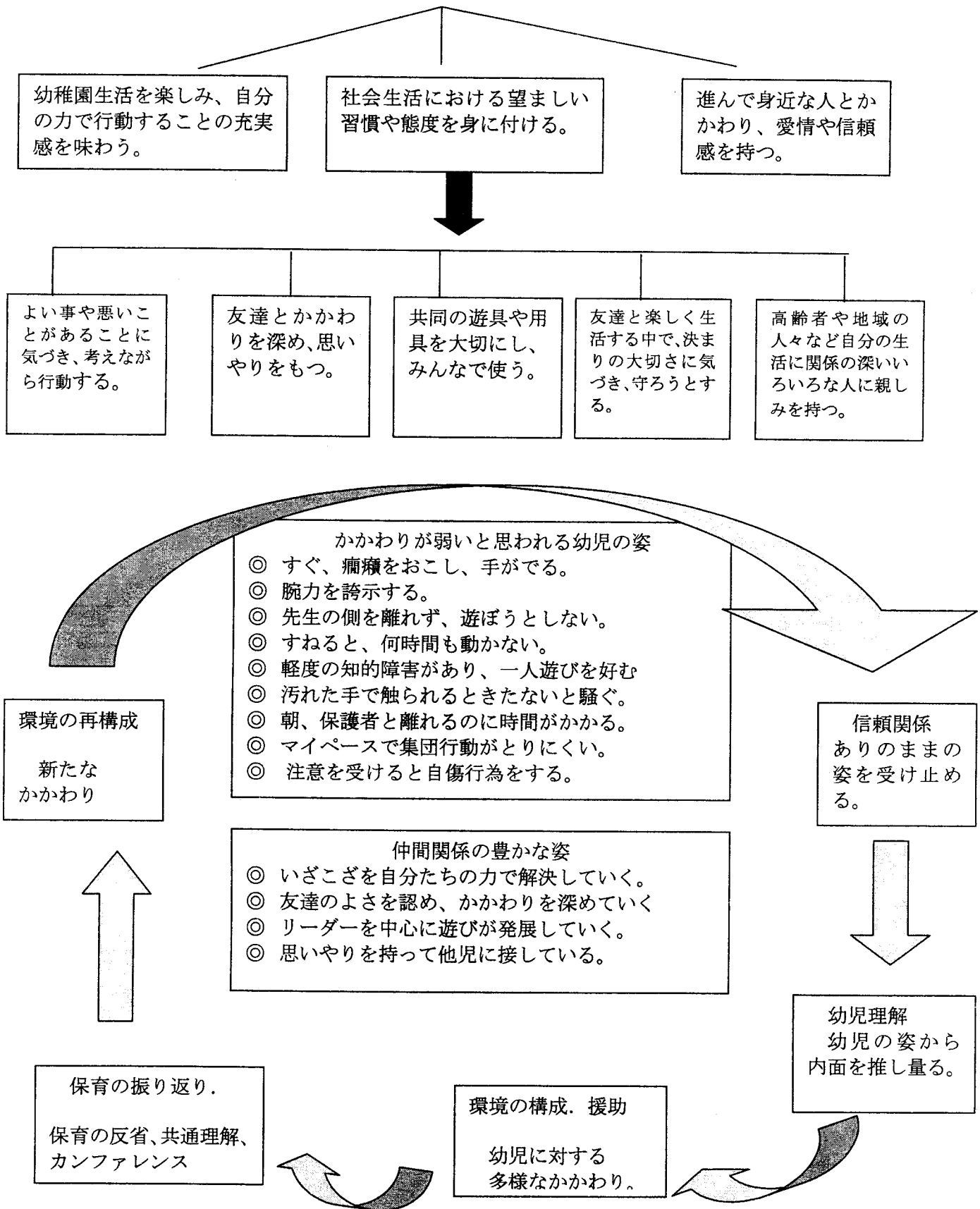


図2 保育の循環

事例 1 (信頼関係を築く)

登園時から様子のおかしいK子、朝会が始まって集まりを拒み、独り離れて立っている。担任は「どうしたの。」「何かあったの。」など声をかけているがK子は貝のように口を閉ざしている。「今日はそこで聞いててね。」と言い様子を見る事にした。一日中だんまりで座り込んでいる。何も話してくれないK子、心を開いてくれないK子、「学童が変わったことが原因だろうか。」「母親とのかかわりに問題があるのだろうか。」担任を中心にカンファレンス。しかし、保護者に聞いてもはっきりしない。数日続いた、だんまりだったが共通理解のもと、時々声をかけながら見守ることにした。(先生方みんなが心配していることを気付かせる。You世界の安定を図る。)

変化が表れた1日目

登園してきたK子玄関横のある職員室の前で立っている。「kちゃん、おはよう。」「・・・」「Kちゃんおはよう。」「べー。」舌をだし挨拶をかえす。「かわいい挨拶しよう、Kちゃん、おはよう。」「べー。」と言いつつ部屋へ。

2日目、「Kちゃんおはよう。」「べー。」T1「わかったKちゃんのおはようは、べーなんだ。」T2「なあんだ、どこの国の言葉なの意味わからなかった。」T1「先生も今日から挨拶が変わるよKちゃんべー。」「べー。」「べー。」「べー。」「べー。」数回言い合って部屋へ。

3日目、T1「Kちゃんべー。」「Kちゃんべー。」K子返事ができずそのまま部屋へ。

4日目、T1「Kちゃんべー。」K子堅い表情がゆるみそうになるがそのまま部屋へ。

5日目、T1「Kちゃんべー、どうして返事してくれないの。」「Kちゃんべー。」K子笑いながら部屋へ。K子の変化についてみんなで喜んだ。

その後、「べー。」の挨拶はなくなり、職員室入り口でにっこり笑顔を見せるようになった。

「Kちゃん、留め金してるね。かわいい。」など、ちょっとした変化を捉え、声をかけていくことで、「先生今日の洋服きれい。」と自分から先生とのかかわりを持つようになった。

考察：幼児が表出する姿にはいろいろあるが、K子の行動について、「問題行動であり、挨拶の指導をする必要がある。」と捉えると、ますます心を閉ざす結果になったのではないだろうか。あるがままを受け止め、その行動から「何が言いたいのか」、「どう思っているのか」内面を理解していく努力の大事さを実感した。

幼児は周囲の人に自分がどう見られているかを敏感に感じ取る。教師の目が、その子の問題点ばかりに向けられていると、どうしてもその幼児に接するときの態度や表情、言葉などが冷ややかなものになってしまう。その結果、幼児と教師の信頼関係が失われてしまったり、その幼児らしい動きができなくなってしまうこともある。反対に、幼児の育ちつつある面や、よさに目が向けられると自然にかかわり方が温かいものになり、安心して自分らしい動き方ができるし、意欲や活力も高まってくる。

T. ゴードン『親行—新しい親子関係の創造』によると子どもからの様々なメッセージに対する親の反応の90%は①命令・指示 ②注意・脅迫 ③訓戒・説教 ④忠告・解決策などの提案 ⑤講義・論理の展開、⑥批判、非難等が多く、これらの反応は親と話が続けられなくなったり、反抗的防衛的などのマイナスの影響をもたらすと言う。子どもからの感情メッセージに答える適切な方法は「そうか」「本当?」「ふーん」といった心の扉を開く「ドア・オープン」の言葉を発したり「それについてもっと知りたい」「あなたはどう思うの?」など相手の話を引き出す能動的な聞き方であるという。

このような親子のやりとりにおいての指摘は教師と幼児との関係にもあてはまることであり、教師は幼児の行動に対する高圧的な評価の言葉(行動を否定する)をなくし、信頼関係を築くことが保育していく上で重要であると考えられる。

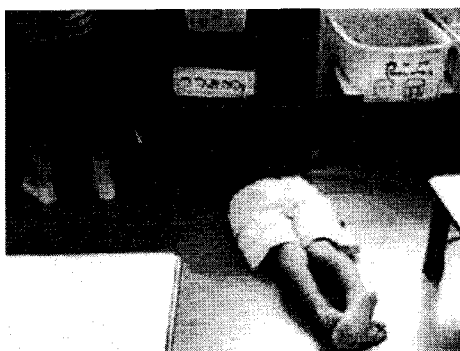
事例2 (友だちとの関わりにおけるG男の変容)

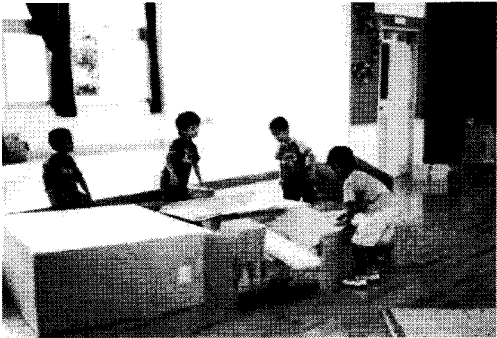
G男の実態

父親と2人暮らしである。父親は建設業で早朝の出勤が多く、一緒に過ごす時間はほとんど無いようである。近所に祖父はいるが、難聴でコミュニケーションが取りづらい。G男は2・3歳の頃に父の仕事の関係で大阪へ転居。入園前になって戻ってきた。集団生活の経験がなく、一人っ子の為か入園当初から落ち着きが無く、短気ですぐ手が出るので「乱暴な子」という印象を周囲に与えた。語彙は豊富で表現力は豊かである。先生のお手伝いも喜んでする。愛情不足による心の不安定な状態は友だちを誉めると嫌がるなどの言動から推測される。

生活習慣調査から父親は、G男について、身の周りの片付けなどは自分で出来ると捉えているが、「おはよう」や「ただいま」、食事時の挨拶などは言われればできると回答している。園では登園の早いG男が玄関先で大声で挨拶するのを時々耳にする。また、挨拶はきちんと返してくれる。このようなことから、家でのコミュニケーションがうまく取れてないのではないかと考えられる。

時 期	幼 児 の 姿	教師の思い・援助
4 月	<p>入園式の日、腰掛ける事ができず落ち着きの無さが目立った。</p> <p>友だちとのトラブルが多い。毎日のように「G男が蹴った」「G男が勝手に積み木を取った」等の訴えが頻繁である。教師が叱り付けると、「俺が悪いんだ」「俺はどうせ悪い子だから」と自分の頭を叩いたり、腕を噛んだりして自傷行為をする。</p>	<p>情緒的に問題があるのか、見守ることにする。</p> <p>初めて、接する幼児の自傷行為に驚いてしまったが、すぐに腕を押さえながら抱きしめた。G男は悪い子ではないこと、しかし、友だちが困っていることややって良いことと悪いことがあることを話す。</p>
	<p>注意をすると自傷行為をするG男について共通理解のためのミーティングをもつ。</p> <p>○叱られる事が嫌で先生の注意を逸らせたのだろうか。</p>	<p>○叩かれるのが怖くて、自傷行為をすることで許してもらおうということだろうか。</p> <p>○自分を大事にすることを分かってほしいね。</p> <p>○良いこと悪いことは、はっきり知らせたいね。注意する時は話し方に気を付けよう。</p>
	<p>○先生達みんながG男のこと好きだと態度で示していこう。</p>	<p>よさを見つけて褒めていく。語彙が豊富なのでみんなの前で話す機会を多くもつ。(帰りの会、絵本の読み聞かせ)朝の出会いを大切に「G男おはよう」と抱っこする。等のG男への接し方を変えていった。</p>
5 月	<p>K男と遊びたいので追いかけて回すG男。K男が「今日は遊べない」と言うと、蹴ったり、たたいたりするので困っているようだ。乱暴な言動が時々、嫌がられる。それでも、やさしいK男、H男やG男、W男を誘って園庭へと出ていった。</p>	<p>K男、G男、W男、H男、家が近く降園後も一緒に遊ぶことが多いようだ。昨日の遊びの続きで仲間としての世界を共有している。</p> <p>しかし、K男にとって、この関係が負担になってないかどうか見守る必要がある。</p>



時 期	幼 児 の 姿	教 師 の 思 い ・ 援 助
6 月	<p>月曜日朝の清掃活動。草むしりを頑張っていたG男、砂で遊んでいたJ男に近づき遊び始めた。そのうち、J男がG男に砂をかけはじめた。相手が驚いたり、困った顔をすると喜ぶJ男、ますますかけてくる。「やめろ」と言いながらG男も遠慮がちにかけ返していたが、とうとうその場を離れていった。</p> <p>みんなの前での発表などが自信に繋がった。友達と衝突しても手をギュッと握り、歯をくいしばり、自分の気持ちを抑え、コントロールする姿がある。</p>	<p>これまでのG男から、予想しなかった行動をとっている。</p> <p>相手が持病のあるJ男ということもあって我慢したのだろう。弱い子へのいたわりの気持ちを認め、我慢したことを褒めてあげたい。</p> <p>我慢する様子がよく見られるようになった。トラブルを自分たちで解決してほしい。また、自分の思いを言葉で伝える大事さを分かってほしい。</p>
9 月		<p>担任のG男への接し方がモデルになったり褒められる体験を通して、落ち着いた行動が見られるようになり、一学期のような言いつけや訴えも聞こえなくなった。</p> <p>協力して遊ぶことの楽しさも分かってきたようだ。(友達との楽しい生活を共有したり、共感体験が増えることできまりの大切さや守ろうとする態度が育つであろう。)</p>
1 0 月	<p>T子が突然保育者の所へ走ってきた。</p> <p>T子「先生、G男がT男のお腹にのったり、キックしていたよ」その場へ行ってみると、G男は「俺がわるいんだー」と自分の頭を床にゴンゴンとぶつけている。周りには数人の子がG男をじっと見ている。</p> <p>T子「自分が悪いて分かっているのに自分傷つけたらだめだよ。」</p> <p>K男「もうT男も許すって言うからやめれ。たんこぶできるよ。」</p> <p>M男「どうする？夜までずっとこんなしているのかな」</p> <p>T子「しーっ、もう何も言うな」</p> <p>G男「いいよ、俺の事なんかほっといてくれ」</p> <p>T子「もういいよ。自分がやりたいようにさせればいいさ。どうせ、自分が悪いんだからさ。」</p> <p>G男はその場から逃げ出してしまった。</p> <p>T「T子とM男はG男にどうしてほしいの？」</p> <p>T子「やさしい心に入れ替えて欲しい」</p> <p>M男「(心が)強くなってほしい」T子とM男の表情は真剣である。その後、G男はT男を呼び、「T男、ごめんなさい。」と謝った。</p>	<p>T子の知らせを聞き、少し残念な思いでその場に行ってみたが、自分たちでG男を説得している姿や、きつい事を言ったのにその後もずっとG男の様子を見つめるT子の姿、いつもG男と喧嘩ばかりしていたM男の声かけなど4、5月の頃とは全く違ったみんなのG男にかかわる態度に驚いた。</p> <p>自分たちで解決していこうとする姿を見て、G男だけでなく、周りの子どもたちも発達していることを実感した。(自分を傷つけるG男へのいたわりや思いやり、許そうとする気持ち)</p> <p>まだ、自傷行為やトラブルを起こすG男だが、友達に助けられたり、支えられたりしながら変容して行くだらう。</p> <p>自分から友達に抱きついたり、やさしくしたりと変わり始めたG男を見守っていこう。</p>

時期	幼児の姿	教師の思い・援助
1月	<p>登園が早かったので、「シール切り」もゆっくりできた。自分だけの特別なお手伝いと言うことで喜んで行っている。</p> <p>「今日はこれもやってみる？」準備した「ビーズ移し」に飛びついてきた。</p> <p>なかなかお箸でつまめず、イライラする事もあるが、何度か繰り返し、最後は6-7分かかり最後までやり通した。上機嫌で待っている子と交代して、外へと出て行った。</p>	<p>2学期末より特に、集会の場で落ち着きのなさが目立ってきた。カンファレンスにおいて、大好きな先生のお手伝い「シール切り」。また、モンテッソリー教材を参考にした「ビーズ移し」など、ある一定時間集中してやる「お仕事」を考えて準備しておくことを話した。</p> <p>「お箸でビーズをつまんで移していく。」単純な活動だが馴れないと緊張し、時間がかかる。子供たちは気に入ったようで交代して遊んでいる。</p>
1月18日	<p>T「G男、一緒にこま回ししない？」</p> <p>G男「いやだ」</p> <p>T「それじゃあ、K君おいで教えてあげる。」</p> <p>G男「Kは僕と遊ぶんだ。」</p> <p>T「でも、K君はこま回しやりたいみたいよ。」</p> <p>この頃、よく遊んでいるK君がやりたいと言うので、しぶしぶついてきた。K君と一緒にコツを教えてもらいながら何度も練習している。回る回数が多くなり、入室に時間になって、やっどこまを離れた。</p>	<p>G男は何度かこまを回せたことがあり、帰りの会でも喜んで報告していたが、その後、遊びは続かず中途半端な状態である。</p> <p>どうにか、「こま」を体得させたい。</p> <p>今回は少々、強引にこま遊びへ誘導する。</p> <p>とうとう「コツ」がつかめたようだ。</p>
1月20日	<p>登園後、すぐにこまを持って園庭へ。</p> <p>小学校参観の保護者がこま回しの仲間に加わっている。</p> <p>「おじさん、僕と競争しよう」と言いながら数人の友達と一緒にこま回しを楽しんでいる。</p>	<p>これまでと違い、失敗しても次はできると言うことが分かっているのだろう。落ち着いて遊びに取り組んでいる。</p>

考察：人とのかかわりの弱さから、G男について観察してきた。

特に、「どのような援助が落ち着いた行動となるか。自制心を育てることができるか」を発達課題と捉え、具体的な援助を模索してきた。時々、「わがままを許しているだけではないか」との迷いもあったが、「心の安定」をG男の個人目標と捉えた。入園当初の情緒不安定な言動は、現在、一定の変容があり落ち着いた行動が見られる。しかし、カンファレンスを繰り返しながら、援助を工夫してきたが何度か一学期の状態に戻る事があった。その原因には、父親との関係（you世界の不安定な状態）があり、保育者だけでは解決できないことである。

保護者との連携なしには健全な成長は望めないが、なかなか応じてくれない。今年になって、父親は本土へ転居し、G男は祖父と生活することになった。また、降園後の友達関係、近所の人たちとのかかわり方も問題になることがあり、小学校への進学については連携して見守っていきたい。

事例 3 (J男の育ち)

J男の実態：両親、妹の4人家族である。3歳の時にけいれん、意識障害が起こり、琉大病院へ入院。「硬膜か水腫」と診断され、手術を受けたが記憶障害が残った。筋力が弱く、経験不足もあって体の動きがぎこちない。発達の状況は、検査を嫌がり「検査不能」との結果を受けたが、これまでの生活の様子や発語の状態から2・3歳の発達と思われる。

時々、好きな子と遊び始めるが、ペースが違うので続かないことが多い。

時期	幼児の姿	教師の思い・援助
1学期	<p>女の子たちが既に始めているママゴトコーナーに近づいて、何も言わず立っている。</p> <p>T.「J男ママゴトしたいの？言わないとわからないよ」 J男.「はいっていい？」K子.「いいよ」 おたまを2本使って料理している。</p> <p>T子.「1本貸して」J男.「いやだ」「かして」「いやだ」 自分の使っているものを貸したくない J男は保育者を見て、加勢をしてほしい様子だが、何も言わない先生に怒って持っているものを投げ捨てた。</p> <p>J男.「先生、きらい、ばか、ぶた」助けてくれない保育者に殴りかかってくる。やめるように言うが聞かないので手の甲をたたき返すと大声で泣き叫び、うわばきを投げたり、名札をはずして投げたりといろいろ抵抗する。しかし、機嫌をとる者が誰もいず、しまいにはあきらめて、「ごめんなさい」といい、ママゴトを続けた。</p> <p>朝、保育者を確認すると、安心して戸外へと出て行くが、「せんせい、くるな」と言う。</p> <p>友達に「遊ぼう」等、かかわろうとする姿が見られる。</p>	<p>遊びのきっかけをつくる。</p> <p>これまで病気のせいもあり、気遣われて生活してきた J男、自分の思い通りにならない事もあることを分かってほしい。 (共同の遊具や用具はみんなで使う。)</p> <p>危険がない限り子ども同士のかかわりを見守る。</p> <p>同じ場所においても一人遊びの状態であるが一緒に遊ぶともっと楽しい事に気づいてほしい。 (I、you 世界の生活)</p> <p>you 世界の安定があつてwe 世界へ繋がる事が分かる。</p>
2学期	<p>ある日、友達が作った大型積み木の家やママゴトセットを崩し始めた。みんなはJ男のすることだからと我慢しているので喧嘩にはならない。しばらくして、「いれて」とJ男が言う。内心怒っているみんなは「だめ」と断っていたが、U子「こわさない？いじわるしない？壊さないんだったら入ってもいいよ」</p> <p>J男を弟のように可愛がっているU子、約束させてから仲間に入れた。J男、赤ちゃん役で「たべさせてー」と、お母さん役のU子に甘えている。</p> <div data-bbox="236 1547 563 1794"> </div> <div data-bbox="252 1816 523 1921"> <p>シール貼りを手伝う U子</p> </div> <div data-bbox="579 1547 914 1794"> </div> <div data-bbox="587 1816 914 1921"> <p>友達と砂遊びを楽しむ</p> </div>	<p>1学期と違い、友達とかかわろうとする様子も出てきたJ男。</p> <p>女の子たちは、弱いJ男ということで、いたづらを大目に見たり、遊びを手伝ってあげたり、励ましてあげたりと「思いやり」を持って接している。また、J男も自分の欲求を認めてくれる女の子との遊びを好む。</p> <p>男の子の中には、「叩くとたたき返す」対等な反応をする子も多くいて、その子たちとのかかわりから多様な感情体験を味わわせたい。</p>

時 期	幼 児 の 姿	教 師 の 思 い ・ 援 助
2 学 期 後 半	<p>H子が登っているタイヤの山に興味を持ち、自分も登り始めた。「こわい」と言いながらもH子に励まされ、頑張っている。あっちからがいいか、こっちからがいいか、足場を探りながら登っている。時間がかかるので、H子は待ちきれなくなり降りてしまうと、「おりないで」「まって」「J男、がんばれしてー」と泣きべそをかいている。H子は再び登り「J男、がんばってー」と、</p>  <p>声をかける。足場を探り、腕を震わせながら、てっぺんまで登ったJ男、かなり怖かったらしく、すぐ、降りてきた。しかし、また登り始めた。3回目達成した時は、「R先生呼んできてー」「先生に見せる」と元気な声で話している。その後はミルクを飲む元気もなく、部屋の隅で横になっている</p>	<p>友達の遊んでいる事柄が刺激になっていろいろな事に関心を示す。タイヤ登りも本人にとっては勇気のいることである。</p> <p>友達の励ましに勇気を得て、挑戦した「タイヤ登り」。</p> <p>J男の3回も繰り返した行動から「タイヤのぼりは自分の発達課題」と無意識の内に捉えたのではないだろうか。</p> <p>(思い通りに動かせる自分の体)</p> <p>達成感があり満足したと思われる。</p> <p>保育者が側に居ても友達を頼りにすることが多くなった。</p> <p>又、種々の体験を重ねることで語彙が増えてきた。発達を認め、頑張った事を誉める。</p> <p>今日の様子を保護者に伝え、休息が必要なことを話す。</p>
3 学 期	<p>寒さのせい、マラソンだと言って園舎周りを走る子が多くなった。2学期後半から全身を使う心地よさを知ったJ男、自分も走り出した。鬼ごっこやマラソンが続いたある日、「タイムレンジャー」になって、男の子に挑み始めた。すぐに、「ごっこ遊び」となり汗をかきほ</p>  <p>どに遊び込んだ。</p>	<p>見守ったり、遊びの仲間入りをする。</p> <p>J男に何をしているか聞くと「タイムレンジャー」と言う。他の子に聞くと「わからない、ただ遊んでいるだけ」との返事である。</p> <p>自然な思いやりと寛容な心を感じた瞬間である。本気でJ男の相手をしているのだ。微妙な処で手加減しながら。</p>

考察：1学期、ほとんど室内でママゴトをしていたJ男。友達が周りに居ても保育者としか遊ぼうとしない。しかし、同じ場所に居ることで、ママゴト道具を取り合いしたり等のかかわりが出てきた。

こういうかかわりを通して友達の存在を意識し、さまざまな感情体験をすることで友達と遊ぶ楽しさがわかってきたようだ。自分からかかわろうとする態度が育ち、語彙がふえて自分の思いを言葉で伝えることが出来るようになった。また、周りの子供たちも、思いやりを持って接したり、仲間として自然な対応をしている。子供たちの様子からは「特別なJ男」という捉えは見えず、「J男はこういう子」と個性として受け入れているように感じられる。J男の場合は特に保護者と連携して「共に健やかな成長を願う」という信頼関係を結ぶ必要がある。毎日のお迎え時に、園で大事に考えていることを伝えたり、変容を共に喜んだり常に気持ちを一つにする事が大事と考える。

事例4 (豊かな仲間関係)

R君、T君、U君 入園当初から虫取りに夢中になり将来は昆虫博士になると言う3人ぐみ。目的をもって登園し、自分たちで生活をすすめている。

今日も3人は家から持ってきた「カミキリ虫」と朝、庭で捕った「せみ」と一緒にあそんでいる。「おまえの家はここぞ。あったかいだろう」靴下にいれたり、2ひきのせみで「たたかいた」と言いながら楽しんでいる。

側でみずやりをしている教師のことは気にもとめないようである。

急に静かになり移動していく。

みずやりを続けながら様子をうかがう。

T・「どうしたの」

R君「Tがカミキリほしいって」

T君「せみと交換してって言っているだろう」

R君「せみはいいよ」

T・「そうなの」

この3人はいつも一緒に楽しそうだな。



もめそうだが自分たちで解決出来るだろう。教師に仲介を求める気はないようだ。

教師は成り行きを見守ることがいいと判断した。

R君、T君にしぶしぶカミキリ虫をわたし、君と園舎裏口へと行ってしまった。



カミキリが手に入ったのにうかない顔のT君 →



2人はカミキリをどうやって取り返そうか相談している。

T君「これかえすよ。」一人になったT君望み通りカミキリは手に入れたが、みんなと一緒に遊べないでは楽しくないと思ったかカミキリを返し、せみが手元へ戻ってきた。

しかし、せみはいらないらしく、T君「みんな、とんでいけー。」と空に向かって投げ上げた。それを見ていた2人だったがカミキリをもってT君から離れていった。

あの3人、帰る時間までどうなるのだろう。

しばらくして、弁当の時間

3人は一緒になって弁当を囲んでいる。

カミキリは入室時に逃がしたようだ。

考察

大人になったら、昆虫博士になると断言している3人。これまでの生活も虫捕りなどを通して、共有感や共感を体験した仲間なのだろう。入室までにカミキリを逃がしたことは、せみを逃がしたT君への思いやりと思われる。仲間との豊かな世界の広がりに関心し、見守り、任せることで介入者にならずに済んだ。



VII 成果と課題

1 成果

- (1) 人とかかわる力の発達が専門書などを通して、理論的に捉えることが出来た。
- (2) 人とかかわりにおける初期体験（家庭での人間関係、you 世界）の重要さが改めて理解出来た。様々な問題と思われる行動は、you 世界の不安定さから起こることがわかり、you 世界の安定は望ましい we 世界への広がりとなっている。
- (3) カンファレンスしていくことで幼児理解が深まり、援助の方向や、手立てが見えてくる。
- (4) 「あるがままの姿を受け止める（信頼関係）ことから始まる。」大事さが解かった。
- (5) 統合保育において「共に育ち合う」事が実感できた。

2 課題

- (1) 初期体験の重要性を保護者に伝達する方法。
- (2) 保育カンファレンスをどのように取り入れていくか。
- (3) 表出する幼児の姿から内面理解と一人一人の発達課題をどのように捉えていくか実践を深めたい。
- (4) 保育記録の工夫。

3 終わりに

教育研究所での半年間の生活は、私のこれまでの「保育の反省」と「保育とはどういうことか」を再確認していく日々でした。この研究で得た成果を今後の実践に生かしていきたいと思えます。

本研究を進めるに当たってご指導くださいました中頭教育事務所指導主事の徳本紀子先生、研究所の所長初め、諸先生方、職員の皆様に深く感謝申し上げます。

また、「保育カンファレンス」ということで普天間第二幼稚園の園長や職員の協力なしには成果を得ることが出来なかった研究でもあります。ありがとうございました。

そして、泣くも笑うも一緒にと過ごした、同期研究教員の先生方に感謝致します。

主な引用・参考文献

- ① 文部省 『幼稚園教育要領解説』チャイルド 1999。
- ② 文部省 『幼稚園教育指導書資料第3集（幼児理解と評価）』1992。
- ③ 無藤隆／森上史朗編『保育内容（人間関係）』 ミネルヴァ書房 1998。
- ④ 森上史朗／高杉自子編『保育原理』 ミネルヴァ書房 1997。
- ⑤ 森上史朗他『発達 68』 ミネルヴァ書房 1996。
- ⑥ 倉橋惣三 『育ての心』フレーベル館 1976。
- ⑦ 相良敦子 モンテッソーリ幼児教育『ママ、ひとりですのを手伝ってね』講談社 1985。

